

【特集】D. グレーバーと自由への展望：
〈労働〉と〈抵抗〉をめぐって（1）：女性
の解放とアナキズム：エマ・ゴールドマン
ン，伊藤野枝，そしてロジャヴァ革命に焦点
を当てて

TANAKA, Hikaru / 田中, ひかる

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

759

(開始ページ / Start Page)

22

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

2022-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025138>

女性の解放とアナーキズム

——エマ・ゴールドマン、伊藤野枝、そしてロジャヴァ革命に焦点を当てて

田中 ひかる

はじめに

- 1 エマ・ゴールドマンの生涯に見る「今・ここで」の解放の追求
- 2 女性の解放とアナキーの実現
- 3 伊藤野枝による「今・ここで」の女性解放論
- 4 女性の解放を通じてアナキーを実現する試み
おわりに

はじめに

本稿は、デヴィッド・グレーバー（David Graeber, 1961-2020）が強調した、アナーキズムを特徴づける重要な要素である「予示的政治 Prefigurative Politics」、すなわち「自分が創造したいと思う世界に、意図的に似せた組織の諸様式」[を作り出す]（Graeber and Grubacic 2004 : p.3）という実践によって実現される「アナキー」（「支配のない状態」）が、よりいっそうアナキーな性格を強める上で、「女性の解放」がきわめて重要な要素である、という点を明らかにすることを目的とする。ただし、本稿では「予示的政治」という語を、「今・ここで理想的な状況を作り出す思考と実践」と言い換えることにする。

このようなテーマを設定した理由は、生前のグレーバーによるアナーキズム論においてジェンダーを含めたさまざまな「差異」に基づく抑圧が見過ごされている、という指摘がなされてきたからである。たとえば、イェンス・カストナーは、グレーバーを追悼する記事の中で、グレーバーが「見知らぬ人を自発的に助けるといった単純な行為」を「アナーキズム」と呼び、現在でもすでに「アナキストの社会関係に囲まれている」と主張している、という点、そして、「支配」と「国家」を同一視している、という点を批判している。

その上でカストナーは、1点目については、見返りを求めない日常的な相互扶助や人と人との協力を、あえて「アナーキズム」と呼ぶことにどれほど意味があるのか、という疑問を呈し、2点目については、「国家なき社会」においても支配はあり、したがって、「社会階級の再生産」に対抗する運動、「反性差別」「反レイシズム」といった行動が、そのような「国家なき社会」においても必要である、と論じている（Kastner 2020）。

言い換えれば、国家と資本主義による「支配」がある中での日常的な協力や相互扶助、あるい

は、国家の不在だけでは、「支配のない状態」としては不十分であるばかりでなく、階級・ジェンダー・人種を要因とする抑圧は存在し続けるため、それらの抑圧に対する闘争が必要である、とカストナーが主張していることになる。

以上の2点はともに、「アナキーとは何か」あるいは「アナキズムとは何か」という問題を論点にしている。たしかにここでは、グレーバーが国家の不在に「アナキー」を見出し、また、日常的な人と人との協力関係を「アナキストの社会関係」と呼んだことだけが問題にされている。だがこの批判は、「新しいアナキスト」によって行われる「合意形成プロセス」を含む直接民主主義の実践を、グレーバーのように、「アナキズム」と呼ぶことについても向けられているのではないかと筆者は考える。

そもそもアナキズムが理想とする「アナキー」は、一人ひとりのアナキストが何を支配や抑圧と見なすか／見なさないかで異なってくる。言い換えれば、多様な支配や抑圧を視野に入れるか入れないかで、「アナキー」という理想状態における「支配のない」という性格が強くなるか、あるいは、さまざまな抑圧が持続するかが決まってくるのである。この点を意識することにより、「アナキー」の描き方は大きく異なるはずである。カストナーから見ると、グレーバーの描く「アナキー」には、この点で問題がある、ということになる。

もちろん、グレーバーは、国家が不在であれば、いかなる社会でもアナキーが実現されている、と述べてきたわけではない（グレーバー 2006：64、70-74頁）。それにもかかわらず、彼が、いくつかの人間集団もしくはその構成員を「アナキスト」と呼ぶ際、彼らの間で残り続ける抑圧の問題を議論していないケースが見られるのはたしかである（グレーバー 2006：107頁）。

また、グレーバーは、「コミュニズム」、すなわち、見返りを求めない人びとの協力や相互扶助、あるいは共有といったさまざまな実践が、資本主義社会において機能していると主張しているが、それによって階級・ジェンダー・人種を原因とする支配や抑圧が解消されるのか、といった問題を議論していない（グレーバー 2016：142-154頁）。したがって、カストナーの批判に一定の根拠があると認めることができる。

グレーバーの描く「新しいアナキスト」による、「今・ここで」自分たちが理想とする状態を作り出す、という実践についても、同様の批判は可能である。たとえば、「アナキズムのプロセス」とも呼ばれる「合意形成プロセス」、すなわち「新しいアナキスト」たちによる直接民主主義を実現させる実践が、もともとはフェミニズム運動によるものであるとグレーバーは指摘している（Graeber and Grubacic 2004：p.4；グレーバー 2015：230-231頁）。しかしながら、「新しいアナキスト」の運動内部で起きうるさまざまな抑圧やその克服は、グレーバーによって中心的な話題としては取りあげられていない。

他方、アナキストによる運動とその内部における権力関係、とくに男性による女性に対する支配という問題については、1960年代末から現在まで、女性のアナキストたちによって提起されている。ジュディ・グリーンウェイは、1960年代終わりのアナキズム運動内部で、男性による女性に対する性暴力を正当化する論理が存在し、これに対して闘うために女性のアナキストたちが独自の運動を立ち上げた、と回想している（Greenway 1997：pp.170-171；田中 2019も参照）。

またルース・キンナも、1980年にロンドンで起きたアナキストによる性暴力事件を取りあげ、

さらに、現在のアンナキズム運動において目にする文書や行為を見ると、今日でもフェミニストは、アンナキズム運動内部で「慣習化された性暴力」との「闘争」の途上にある、と述べている (Kinna 2020 : pp.173-174)。加えてキンナは、そういったフェミニストたちの抗議や批判が、アンナキズム運動内部に変革を起こす原動力となり続けた、と指摘している (Kinna 2020 : pp.166-167)。

しかもキンナによれば、アンナキストたちの「行動主義 activism」が発展してきたのは、運動内部に持ちこまれた「挑戦と対立」があったからである。なぜなら、この「挑戦と対立」を通じて、「いかに行動し、自ら学び、自分たち自身を批判するか、ということを理解する」ことが可能となるからである。たしかに、運動内部で起きる対立や紛争は、それまで「アンナキストの真理」であったものの「崩壊」をもたらすが、それは同時に、思想・運動にとって「建設的」でもありうる。このことを示しているのが、アンナキストのフェミニズムなのだ、とキンナは指摘している (Kinna, 2020 : pp.175-176)。

このようなフェミニズムが持ちこむ「挑戦と対立」、それによって起きる「分裂、分解、葛藤」 (Kinna 2020 : pp.175-176) は、グレーバーが描く「新しいアンナキスト」による「合意形成プロセス」には見られない (Graeber 2002 : pp.71-72)。これに対して、キンナの描く、「挑戦と対立」を常に体験するアンナキズム運動では、紛争や対立によって不安定であるため、グレーバーの述べている「人間の可能性に関する感覚」の変化や「別の世界」を体験することが不可能であるかに思える (Graeber 2002 : p.72)。それにもかかわらずキンナは、そのプロセスこそが、アンナキストたちが、行動し、学び、自身を批判的に捉える機会となる、という意味で「建設的」だと述べているのである。

同じフェミニズムを起源としていながら、キンナが描く「アンナキ化」は、グレーバーが描く「新しいアンナキスト」の「合意形成プロセス」あるいは「予示的政治」と異なり、対立や紛争を伴うが故に、きわめて不安定で流動的なプロセスである。ところがキンナは、女性のアンナキストたちが、アンナキズム運動にもたらしたものとして「予示 prefiguration」を挙げている (Kinna 2020 : pp.166-167)。彼女たちが運動内部で起こすこと、たとえば家父長主義に対する抗議や批判が「予示」であるとすれば、「今・ここで」理想的な状態を実現する、という実践、つまり「アンナキ」を創造する実践には、「挑戦と対立」というプロセスが含まれる、ということになる。

そうだとすれば、グレーバーが「新しいアンナキスト」による実践とした「予示的政治」は、家父長主義に対する批判、そして「女性の解放」という視点を導入することで、さらに「アンナキ」な性格を強める、と想定することが可能になる。そこで本稿では、「今・ここで」作り出される理想的な状態の持つアンナキな性格をさらに強める上で、「女性の解放」という要素が、どのような意味を持つのか、という問題を検討することにした。これにより、グレーバーによって提起された「予示的政治」に関する議論を、さらに発展させることに寄与することができるであろう。

以下では、アンナキズムを「今・ここで」実現するものとして論じたことで知られるエマ・ゴールドマン (Emma Goldman, 1869-1940) ⁽¹⁾ の生涯を、女性、そしてすべての抑圧された人びとの解

(1) 田中 (2015) を参照。

放を追求し続けたという点に焦点を当てて見ていく。次いで、その間に彼女が展開した女性解放論を検討し、そこでの中心的な議論が、幸徳秋水（1871-1911）、大杉栄（1885-1923）、そして荒畑寒村（1887-1981）のような男性のアナキスト・社会主義者から見過ごされる一方、伊藤野枝（1895-1923）からは強く支持された、という点を指摘する。また、ゴールドマンや伊藤の主張は、男性のアナキスト・社会主義者に比べれば、「今・ここ」での女性の解放という「予示」であったため、「支配がない」という性格が男性に比べて強かった、と指摘する。

最後に、今日、女性の解放を最重要課題として取り組みながら「国家なき社会」の実現を目指す、シリア北部の「ロジャヴァ」における状況を検討し、女性の解放という課題が、「支配のない状態」を実現する上できわめて大きな意味を持ちうる、と指摘する。以上の指摘に基づいて本稿では、国家が不在である状態を「アナーキズム」と呼ぶ上で、あるいは国家と資本主義による支配の下における日常的な相互扶助などの実践を「アナーキズム」と呼ぶ上では、そこで女性の解放がどれほど実現されているのか、という視点が必要である、という結論を提示する。以下では、エマ・ゴールドマンの女性解放論を見る前に、そのような主張を彼女が展開するに至った要因を、彼女の生涯に確認しておきたい。

1 エマ・ゴールドマンの生涯に見る「今・ここで」の解放の追求

ゴールドマンは、帝政ロシアのユダヤ系住民の家庭に生まれる。家父長主義的な家庭環境から逃れたいという希望を持つ中で、姉とともに、1885年末に16歳でアメリカに移住する（Goldman 1970 [1931] : pp.10-11, 12-14, 21-23）。家族などからの抑圧から逃れるため移住してアナキストになったロシア出身のユダヤ系移民女性は多く、彼女はその一人だった（田中 2020a）。移住後、ゴールドマンは、被服製造労働者として、単調で過酷な労働に従事する中で、証拠もなくアナキスト4名が絞首刑に処せられた「ハイマーケット事件」から衝撃を受けるとともにアナーキズムに関心を抱き、ニューヨークで発行されていたドイツ語によるアナーキズム新聞『フライハイ特 *Freiheit*』を講読するようになる（Goldman 1970 [1931] : pp.7-10, 16-18）。

その頃ゴールドマンは、同じロシア出身ユダヤ系移民の男性と結婚するが、すぐに離婚した後、男性から懇願されて再婚するものの、ゴールドマンの側から要求して再度離婚する。その結果、彼女はユダヤ系移民コミュニティから排除されるという状況に陥ったため、ニューヨークに向かう（Goldman 1970 [1931] : pp.18-20, 23-25）。同地で彼女は、ロシア出身のユダヤ系移民アナキストたちからの歓待を受け、彼らに誘われて参加した講演会で、『フライハイ特』を編集するドイツ系移民アナキストであるヨハン・モスト（Johann Most, 1846-1906）の講演を聴き、モストに魅了され、彼から多くを学び（Goldman 1970 [1931] : pp.3-6, 28-36 ; 田中 2002 も参照）、演説家としての才能を見込まれると、1890年にはモストに代わり、アメリカの諸都市で講演をするようになる。だが、恋人となったモストが自分に求めたものが性的な対象としての「女性」であったということに気づき、さらに、思想的にも対立したことなどにより、決裂することになる（Goldman 1970 [1931] : pp. 40, 46-48, 50-57, 72, 77, 105-106）。

1893年、当時急増していた失業者がニューヨークで集会を開いた際、ゴールドマンは失業者に

対して、経営者たちが労働者たちに、仕事もパンも提供することを拒否するなら、パンを奪え、それが神聖な権利である、と主張し、これが革命や暴力を扇動したという理由で逮捕され、1年投獄される。また、このときの報道で「レッド・エマ」などというあだ名とともに、マスコミで取りあげられるようになる (Goldman 1970 [1931] : pp.83-114, 122-132)。

獄中では女性の囚人たちと交流し、また、監獄内の医師によって助手として採用され、出獄後も看護師として働いたことを契機にして、オーストリアの看護学校に入学し、看護師・助産師の資格を取る (Goldman 1970 [1931] : pp.133-151, 161-174)。その後新マルサス派の会議で産児制限と避妊法を知ると、アメリカでの講演の中で取りあげ、女性たちの間での普及を試みるようになる (Goldman 1970 [1931] : pp.552-554)。

1906年、ゴールドマンは他の同志たちとともに、ニューヨークで雑誌『マザー・アース *Mother Earth*』を創刊すると、同誌の資金集めのため、毎年のようにアメリカ各地で講演を行い、支持者を獲得していく (Goldman 1970 [1931] : pp.378-379, 469)。1910年末には、『マザー・アース』誌上に掲載された論説、講演の内容をまとめた論集 (以下「論集」と呼ぶ) を刊行する。同書は、ゴールドマンの同志ヒポリット・ハヴェル (Hippolyte Havel, 1871-1950) による彼女の評伝 (以下「評伝」と呼ぶ) (Havel 1969 [1910] およびハヴェル 2000 [1914] を参照) とゴールドマンによる11のエッセーから構成される (Goldman 1969a [1910])。「評伝」と「女性解放の悲劇」が伊藤野枝に与えた影響については後述するが、それ以外にも同書には、女性の人身売買と売春を生み出している現代社会の支配構造を告発し、女性を抑圧する制度としての結婚が、独立性と尊厳を持つ男女の間での愛とは別のものであると指摘し、女性参政権だけで女性が置かれた状況は変わらない、と主張する、女性の問題を扱った3篇の評論が収められ、これらの一部は日本を含め世界で翻訳された。さらに同書に収められた評論でゴールドマンは、アナキズムが「未来を論じた思想」ではなく「私たちが生きていく中で経験するさまざまな出来事にはらまれる、生き生きとした力なのであり、常に創造され続ける新しい状況」である (Goldman 1969b [1910] : p.63)、つまり「今・ここ」での問題であると主張していた。

その後ゴールドマンは第一次世界大戦へのアメリカの参戦に反対する活動を展開したことによって逮捕され、アナキストとして活動していたことを理由に逮捕された240名以上のロシア出身者たちとともに、革命下のロシアに強制送還される。当初はボリシェヴィキによる革命に期待を抱いていたゴールドマンは、抑圧的な体制に失望してロシアを去り、西ヨーロッパで亡命生活を送り、ボリシェヴィキを批判する著作や記事を発表し、講演活動を展開する (田中 2020b)。彼女のボリシェヴィキ批判は、大杉栄がアナ・ボル論争において常に依拠していたものだが、そのようなイデオロギー上の問題ではなく、「今・ここで」の女性の解放という観点から重要だったのは、自らの「生き方」を通じて多くの女性たちに感銘を与えた、1931年に発表した自伝 (Goldman 1970 [1931]) であり (田中 2020c を参照)、革命下のスペインで、女性のためにさまざまな活動を展開した女性運動「自由な女性たち *Mujeres Libres*」に対する支援活動だろう。スペインの女性たちは、ゴールドマンがアメリカ時代に発表した女性をめぐる諸論文から影響を受け、セックスワーカーの職業訓練、女性向けの教育や医療機関の運営、性・避妊・育児に関する教育を実践し、女性が置かれた状況を「今・ここで」改善することに焦点を当てた運動を展開した (Kaymakçioğlu

2011)。

以上のようにゴールドマンは、アメリカへの移民からその死に至るまで、自身の解放、そして自分以外の女性や労働者など抑圧された人びとの「今・ここで」の解放を追求し続け、そして彼女から影響を受けた女性たちも、同じような理念に基づいて活動した。だからこそ、その死後、ゴールドマンが再び脚光を浴びるのは、1970年代、私的領域における抑圧からの「今・ここで」の解放を問題にした第二波フェミニズムが高揚する時期だったのであろう（Shulman 1983：pp.218-219）。以下では、そのようなゴールドマンによる女性解放論を、大杉栄の自由恋愛論と比較し、その特徴を明らかにする。

2 女性の解放とアナキーの実現⁽²⁾

1897年、エマ・ゴールドマンは、結婚制度を非難するとともに、「女性の独立」「自分自身のために生きること」「自分が気に入った人物であれば誰でも、もしくは、そのような人物が複数いればその数だけ愛すること」「両性の自由」「行為の自由」「愛における自由」「母親の自由」を要求し、さらに次のように主張した。「アナキーを実現したいのであれば、わたしたちはまず、最低限、自由な女性が必要だ。彼女たちは、男性と同様に、経済的に独立している必要がある。この自由な女性がいなくては、自由な母親も現れない。母親が自由でなければ、アナキスト社会の建設というわたしたちの目的を支援してくれるような若い世代は現れないのである」（Goldman 2003 [1897]：pp.272-273）。すなわち、ゴールドマンにとって「自由な女性」の存在は、「アナキー」という理想社会を実現する上での前提であり、その結果ではなかった。彼女は、「今・ここで」の女性の解放を主張していたのである。

それから約10年後の1906年、大杉栄は、「恋愛」が「自由の野」に展開するためには、資本主義社会を破壊しなければならない、あるいは、「共産制」が実現した社会において、「男女の経済的独立の自由」を前提にして「自由恋愛」が実現する、と主張していた（大杉 2015 [1906]：101-102頁）。これを女性解放論として読み替えれば、女性の解放は、「今・ここで」は実現できない、と大杉が主張していたことになる。したがって、先に見たゴールドマンの主張が際立つのであるが、では、どのようにすれば女性の「今・ここで」の自由を獲得できると彼女は主張していたのか。

1906年に『マザー・アース』誌上で発表し、その後論集に収められることになった論説「女性解放の悲劇」（日本では「婦人解放の悲劇」と訳される）でゴールドマンは、次のように述べている。政治的・経済的な「解放」を掲げてきた女性たちは孤立し、「本質的な幸福の源泉が剥奪された」状態にある。したがって彼女たちは、自ら主張する政治的・経済的「解放」という考え方から「解放」されなければならない。

たしかにアメリカのいくつかの州で女性は参政権を獲得したが、政治はこれまで通り腐敗し続けている。「解放」を通じて職業を得た女性たちは皆、身も心も疲弊している。教員、医師、法律家

(2) 本節に関しては、田中（2021）も参照。

といった専門職に就いている一握りの女性もいるが、彼女たちは仕事で疲れ切って帰宅すれば家事労働も引き受けねばならない。だから、少なからぬ中産階級の女性が進んで結婚を望むのである。

しかも、それら専門職に就いた女性ほど、その内面が「空虚で荒廃している」。その原因は、現在普及している「女性の独立と解放」という考え方の「狭さ」にある。これに縛られてしまった女性は、自らの自由と独立が奪われ、仕事に支障が出る、という理由から、恋愛をすること、そして、母親になることを恐れ、その結果、彼女たちの大多数は、「専門職業人という機械人形 professional automatons」となっている（以上、Goldman 1969b [1910] : pp. 214-216, 217-218 を参照）。

ゴールドマンによれば、こういった現状を作り出してきた、より重要な要因は、過去の男性中心社会の「遺物」でありながら現在の社会に存続する「道徳」に、「解放された」はずの女性たちが従っていることにある。「欲と罪」に満ちた人生を送ること、「社会、宗教、道徳」を無視することを唱道している、といった女性解放運動に対する誹謗中傷に対して、自分たちは全くその「逆」である、と彼女たちは反論する。これにより、解放運動に関わる女性は自縄自縛に陥った。実際、女性解放を唱道してきた女性ほど、道徳や社会的偏見にとらわれ、結婚することを進んで選択する。

こういった矛盾に満ちた行為の要因は、「進歩的女性たち」が「解放の意味」を、真に理解していないことにある。彼女たちは、「外的な圧政」からの独立が必要だと考えている。しかし、「内面の压制者 internal tyrants」、すなわち「道徳的・社会的なさまざまな慣習」の方が、人の生と成長にとっては、「外的な圧政」よりもずっと有害である。むしろ「真の解放」は投票や法廷からではなく、「女性の魂」、「内面の再生」から始め、「伝統、偏見、慣習の重荷から解放されること」が重要である。「最も重要な権利は、愛し愛される権利である」。「愛されること、恋人になること、母親になることが奴隷や服従と同義である」という考え方は放逐しなければならない（以上、Goldman 1969b [1910] : pp. 218-221, 224 を参照）。

このような女性解放論は、政治・経済的な権利の獲得ではなく、女性が「内面の压制者」からの解放を通じて新たな関係性を作り出すこと、すなわち、「今・ここで」理想的な状況を作り出す、という意味でアナーキズム的な特徴を持つものだったと言える。しかしながら、このようなゴールドマンの主張は、日本の男性のアナーキスト・社会主義者たちからは理解されることなく、正確に理解したのは女性のアナーキストである伊藤野枝だけであった。以下でこの点について見ていきたい。

3 伊藤野枝による「今・ここで」の女性解放論

1907年、幸徳秋水は「女性解放の悲劇」（幸徳は「婦人解放の悲劇」と訳している）におけるゴールドマンの見解のうち、経済的自立だけでは女性は解放されない、という箇所を焦点を当てて紹介した上で、次のように主張している。「婦人解放の第一着手は婦人をして社会主義を知らしむるに在り」「社会主義を知って、社会主義のために運動するの意なき婦人は是精神的不具者なり、怠惰者なり、先天的奴隷なり」と（幸徳1907）。

しかしながら先に見たようにゴールドマンは、女性が内面化した家父長主義的な慣習から解放さ

れることを訴えていた。しかも、「社会主義」を知る／知らないことや、その運動に加わる／加わらないことで女性の価値がどうなるか、などという議論はしてはいない。したがって、幸徳はゴールドマンの見解を、社会主義を支持しない日本の女性を批判するために利用していただけであった、と言える。

その後、1913年、大杉栄は、ゴールドマンら国外の女性のアナキストや社会主義者という「真に新しい女」は、「いわゆる婦人問題」などに「余り関わらず」、「自己完成を、何よりも強調する事」をしないのに対して、『青鞥』誌に集まる「新しい女」が、「征服階級の男の玩弄品たり奢侈品たる地位から、一躍して征服階級の直接の一員たらしめる女」である、と批判した（大杉2014 [1913]:124頁）。しかし大杉によるこの主張も、幸徳と同様、日本の女性を批判するために、ゴールドマンら国外の女性のアナキストたちの名前を利用していただけにすぎなかった。

さらに荒畑寒村は、1913年8月、ゴールドマンの論集に収められていた彼女の評伝の抄訳を発表した際、以下のように述べている。「僕はこの一篇を、彼の社会改革を除いて個人的解放の存せざるを知らず、女性の奴隷的境遇が現社会の経済組織の所産なるを知らず、自己完成と称する羊頭をかけて芸術的遊戯の狗肉を売れる、いわゆる『新しい女』に示したいと思う」と（荒畑1913:2頁）。

その後、1913年9月、「伊藤野枝訳」として「女性解放の悲劇」の翻訳が『青鞥』に掲載されると、荒畑は、「自己完成よりも社会改革を急ぐ〔中略〕無政府主義者の論文」とこれを評した上で、青鞥社の人々を「その手段方法に至っては、社会革命に拠らず無政府主義に拠らず、いわゆる自己完成と、芸術的遊戯とによる」と批判していた（荒畑1914:30頁）。このように、荒畑によるゴールドマンに関する論評は、「新しい女」の「自己完成」を非難し、「社会改革」を支持するための根拠として利用されたと言える。

これに対して伊藤野枝は、ゴールドマンの評伝を、「熱烈な或る同情と憧憬」を「集注」させ、「いろいろな深いところから来る感激にむせびつつ」読んだ。彼女が何に「感激」したのかといえは、「すばらしい、そして生甲斐のある彼女〔ゴールドマン〕の生涯」である（伊藤2000a [1914]:11頁）。その後、伊藤が執筆した、自らをモデルにした小説「乞食の名誉」では、ゴールドマンの評伝を読んだ主人公の「とし子」が、その「生涯」に、「何物にも顧慮せず自己の所信に向かって進む彼女の自由な態度」を見出す、というストーリーが描かれていた。さらに、「とし子」にとっての「理想の生活」、すなわち「何物にも煩わされず、偉しく、強く」生きる、という、「生き甲斐のある生き方」が、ゴールドマンによって「強くはっきりと示された」とも述べられていた（伊藤2000b [1920]:263-264頁）。

このように伊藤は、ゴールドマンの半生から、「生き甲斐のある生き方」を読み取り、これによって鼓舞される「とし子」を描くことによって、ゴールドマンから一つの「思想」として「生き方」を学んだことを明らかにしている（田中2021:191頁）。このような伊藤によるゴールドマンについての理解は、「個人的解放」が未来に起きる「社会改革」によってしか実現できないと主張する荒畑によるものとは全く異なる。この違いが生まれた要因は、伊藤が家父長主義的な社会規範による圧迫によって苦しみ、「今・ここで」の解放を望んでいた女性だったのに対し、荒畑がそういった境遇に置かれていない男性だったことに求められるだろう。

その後、伊藤が発表していく評論には、「女性解放の悲劇」におけるゴールドマンの主張の強い影響が見られる。たとえば、中産階級の女性が、職を得た後に仕事に専念するだけの「自動機械」となり、男性ほどの収入を得られないため、結婚して母親になることを夢見る、しかし家庭では「二重の労働」に苦しむことになる、と指摘し（伊藤 2000c [1919] : 111 頁）、あるいは、「生き甲斐のある生活」のためには、「強き意志」を持つように、と教育を受けた中産階級以上の女性に訴えている（伊藤 2000d [1920] : 212-213 頁）。ここにはゴールドマンの見解をそのまま引き写している部分があり、また、「内面の圧制者」から解放されるべき、というゴールドマンの主張からの影響も読み取ることができる。

その後伊藤は、大杉栄の「妻」となると、大杉の「一挙一動」が「一々私の気になる」ようになったが、大杉が投獄され、一時的に距離を置くことにより、相手に「同化」されることなく、「自分本位」になり、「他人の生活」には「立ち入らぬようにすることが」大切である、と考えるに至った（伊藤 2000e [1923] : 253, 256-257 頁）。伊藤はゴールドマンから学んだ思想を、「妻」として、「今・ここで」実現しようとしていたのではないだろうか。それは、アナーキズムに「対立と紛争」を持ちこみ、「アナキー化」を活性化させる可能性を持っていたはずである。

以上見てきたように、幸徳、大杉、荒畑らは、ゴールドマンの女性解放論を、「社会改革」「社会主義」に加わらない女性たちを批判するために利用していた。それは彼らが「今・ここで」ではなく、将来起きる革命を通じて理想社会が実現されることで、女性の問題も含めた「個人的解放」が達成されると考えていたからではないか。この3人の中で大杉は、「今・ここで」の「支配への人間的抵抗」を通じて「労働組合」を「将来社会の一萌芽」とすることを主張した人物であるため（梅森 2016 : 258 頁）、その主張には「予示的政治」が表明されているかに思える。しかしながら、自由恋愛論や「新しい女」に関する見解を見ると、大杉の描く「今・ここで」の「人間的抵抗」や「将来社会の一萌芽」には「女性の解放」が入っていなかった、と考えることも可能である。

これに対して伊藤野枝は、ゴールドマンの「生き方」を自らの「生き方」における指針としている。これは伊藤が、ゴールドマンの思想を、女性の「生」という「今・ここで」の問題として受け止めていたからであろう。そうだとすれば、ゴールドマンや伊藤の追求した「今・ここで」の女性の解放は、「予示 prefiguration」であり、しかも、大杉が主張していた「今・ここで」よりも、男女関係の再構築も含む、より「支配のない」性格が強く、「今・ここで」の支配からの解放を想定していた、ということになる。このように見れば、「今・ここで」実現されるべき「アナキー」の意味や内実は、女性の解放という要素を組みこむことにより大きく変わる、ということが理解できるのである。

その後、ゴールドマンも含め、女性たちのアナーキズムは、第二波フェミニズムが高揚するまでは、ほぼ忘れ去られていた。1960年代後半になり、「アナーキズムはフェミニズムの論理的に一貫した表現である」、「フェミニストは、現存するプロテストグループの中で、間違いなく実践的なアナキストと呼べる唯一のグループである」と主張する「アナキスト・フェミニズム」の支持者たちが現れ（Rosa and Maria 2012 [1971] : p.16 ; Farrow 2012 [1974] : p.19）、彼女たちは、冒頭で述べたように、アナーキズムに「挑戦と対立」を持ちこみ、アナーキズムの中に浸透している家父長主義を批判することでアナーキズムを変化させるという「建設的」な動きを生み出し続けた。

このようなフェミニズムの主張が、「今・ここで」「支配のない」性格をさらに強める可能性を考える上で、現在、シリア北部・北東部で実現されている自治領域「ロジャヴァ」（西クルディスタン）の事例は参照に値する。以下で見ていこう。

4 女性の解放を通じてアナキーを実現する試み

ロジャヴァは、トルコ国境に接したシリア北部に広がる、クルド人が多数住む地域であり、アフリン、コバニ、ジジーレという3州から構成される（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.2-9）。2011年、シリアで「アラブの春」を端緒とする内戦が拡大する一方、ロジャヴァでは、自衛組織、地域住民による評議会などの自治組織、さらに、これら評議会をさらに発展させるための西部クルディスタン人民評議会が設立され、街区と農村のコミュニティにおける評議会から始まるボトムアップ型の自治システムが構築されていった（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.51-52, 84-95）。

2012年7月以降、クルド人の自衛組織が、各地で軍事・治安・行政権を奪取し（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.54-59）、2014年までにはロジャヴァの3州が自治を行う州として宣言し、2016年3月にはロジャヴァ・北部シリア連邦制が宣言され（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : p.2）、40%以上を女性が占め、多様なエスニック集団から構成される評議会、法廷、治安部隊、軍、女性組織、協同組合の創設が数ヶ月間にわたり続いた（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : p.52）。

2014年9月から翌15年初頭まで、トルコとの国境の町であるコバニ攻撃を開始したIS（「イスラム国」）を、激しい戦闘の末、クルド人の人民防衛隊・女性防衛隊が撃退して勝利する「コバニの闘い」があった。このイスラム国の「不敗神話の粉碎」をもたらした戦闘が世界に報道されたことにより、2012年に始まる「ロジャヴァ革命」が広く知られるようになる（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.228-231）。

そのような報道の中でも、とりわけ兵士として活躍するクルド人女性に注目が集まり、彼女たちに関する記事が西ヨーロッパの複数の女性雑誌に掲載されるまでになる（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : p.61）。その間、ジャーナリスト、グレーバーのような研究者、そしてアナキストたちが世界各地から支援・交流・現地調査のためにロジャヴァを訪問して現状を世界に知らせ、さらには、義勇兵として戦闘に参加していく人びとも世界各地から集まってきた（Leduc 2018）。

さかのほれば、「ロジャヴァ革命」の起源は、1980年以來、この地域を拠点にしてきたクルディスタン労働者党（PKK）による活動と、これに参加したクルド人住民の運動に見出すことができる。同党は、1978年、アブデュラ・オジャラン（Abdullah Öcalan, 1947-）たちによって創設され、当初はマルクス・レーニン主義に基づいて、ソ連などをモデルとしたクルド人国家樹立を目指していた。1984年からはトルコ占領下の北部クルディスタンでトルコ政府に対するゲリラ闘争を開始し、女性も武器を持って戦闘に加わる。しかし、1990年代初頭に始まるソ連・東欧社会主義圏の崩壊を契機にして、PKKは従来と異なる社会を構想することになる（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.36-37）。

しかも、1993年に創設された女性軍事組織は、武装闘争において成功を収めたことにより、女

性の伝統的な性別役割を拒絶し、ゲリラ内部での家父長主義を克服し、全分野で指導的な地位に男性だけでなく必ず女性もいる「二重の指導体制」という原則、さらに、全分野で女性参加率を40%以上に設定する、という原則を掲げるようになった。これらの諸原則は、革命後、ロジャヴァだけでなくクルディスタン全体で採用されることになる (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : p.37)。

1990年代末、シリアからPKKが退去させられると同時にオジャランは亡命するが、99年、ケニアで拉致され、トルコで死刑判決を受けた後、無期懲役に減刑される (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : p.38)。獄中でオジャランは、環境破壊の原因を人間社会における支配とヒエラルキーに求めたアナーキストとして知られるマレー・ブクチン (Murray Bookchin, 1921-2006) によって主張されたリバタリアン自治主義 (Libertarian Municipalism)、すなわち、都市や村落における住民自治を基礎にして支配なき社会を目指す、という社会変革構想を学び (Fornarola 2019)、また、神話や中東の歴史を研究する (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.38-41)。

その結果、5000年前に成立した家父長制が、現代世界にあるヒエラルキーと国家による抑圧の土台となったという結論に至り、社会における自由の尺度は女性がどれほど自由であるかによって決まる (Öcalan 2019 : p.466)、あるいは、「女性の革命」「ジェンダーの革命」は、同時に男性の解放でもある、と主張するに至る (Öcalan 2013 : p.51)。ここで提起されたのは、女性の解放を中心に据えた革命を通じて、ヒエラルキーや強制のない民主主義を導入するという構想である。これがロジャヴァで受け入れられ、革命に大きな影響をおよぼした (Fornarola 2019)。オジャランはアナーキズムという言葉を使っていないが、「民主主義とは、国家なしで自治ができる共同体の能力のことである」と述べていることから (Öcalan 2019 : p.442)、その主張は、広い意味でのアナーキズムであると言える。

1980年代からクルド人女性による草の根レベルの組織化が続けられていたことにより (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.62-63)、革命後、女性たちは地域の自治・教育・報道・軍事・司法といった幅広い領域の活動に参加するようになり、さらに、さまざまな女性団体を立ち上げて、女性の権利のために活動するようになった (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.64-76)。

しかしながら革命後のロジャヴァでは、それまで広く見られた、男性が女性に対して強力な権限を持ち、女性が夫や家族に経済的に依存し、女性に対する男性によるドメスティックバイオレンスなどが多くの家庭で起きている (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.71, 76, 73, 79)、という状況が依然として見られ、その結果、現在はジェンダー平等を実現する「長く続くあゆみ」の途上であるという認識も示されている (Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : p.77)。

それにもかかわらず、女性たちは、革命を通じた社会変革に手応えを感じている。たとえば、2014年5月、女性報道協会創立会議でメディア・ミヘメド (Medya Mihemed) は次のように述べている「クルディスタン労働者党のクルド人女性は、自由のため、自由な生き方のための闘争を選択した。報道は家父長主義的な心理構造と結びついている。なぜなら、男性の覇権がすべてのメディアを支配しているからだ。しかし私たちの闘いはそれを徐々に壊している」。また、それまではクルド民族国家建設を目指すべきだと考えていた女性活動家は、クルド人とともにアラブ人やアラム人が運営する女性コミュニオンを知ることにより、「国家なき女性中心社会」を創造することの意義を理解した、と述べている。この証言は、「今・ここで」実現された理想的な状態が、今後も人び

との意識を大きく変化させ、これが中東を含め世界全体に波及していく可能性を示唆している（Knapp, Flach and Ayboğa 2016 : pp.75, 80）。

現在ロジャヴァの一部はトルコ軍などに占領され、あるいは、ロジャヴァの混成軍であるシリア民主軍とシリア・ロシア・アメリカなどによって共同管理が行われ、革命の行方は不透明である。しかし、女性の解放を中核にしたボトムアップ型の自治システムが運営されていく中で住民の意識や行動がいかに変化しているのか、という点については、今後も検討していく必要がある。なぜなら、「今・ここで」理想的な状態を作り出す、というアナーキズムの思考と実践、そして、それらを通じて支配と抑圧を解消し、「アナキー」を実現していく上で、女性の解放が現実に果たしている役割を、より詳細に明らかにすることができるからである。

以上のようなロジャヴァでの経験、さらには、エマ・ゴールドマンや伊藤野枝による議論を念頭におけば、国家の不在という状態を「アナーキズム」と呼ぶことが可能か、あるいは、国家と資本主義による支配の下での相互扶助などの日常実践を「アナーキズム」と呼ぶことが可能か、ということ判断する上で、それぞれの状況において女性の解放がどれほど実現されているのか、という視点が必要である、ということがわかるのである。

おわりに

以上、本稿では、「今・ここで」自分たちの理想とする状況を作り出すという実践（「予示的政治」）を通じて、「支配のない状態」を実現することを目指す上で、女性の解放がいかなる意味を持つか、という問題について検討してきた。その中で、まず、ゴールドマンが生涯にわたって追求した「今・ここで」の「生き方」と女性解放論が、伊藤野枝をはじめとする世界各地の女性たちにとっての「生き方」や行動の指針となった、ということ、および、これを大杉ら男性の見解と比較することで、男性の社会改革構想よりも女性の「今・ここで」の解放という思考の方が「支配がない」という性格が強いということが明らかになった。

次に確認すべきは、ロジャヴァにおいて進行中の女性の解放が、革命によって実現された社会の「支配がない」という性格を強める上で果たしている役割についてである。もともと家父長主義的な性格が強かったロジャヴァにおいて女性の解放は、「挑戦と対立」を強める要因であり、したがって、社会的な緊張を高める要素であるが、それにもかかわらず、「男性の覇権」を掘り崩し、公的・私的領域における女性の活動範囲や主導権を拡大し、「支配のない状態」の実現に確実に寄与している。このようなロジャヴァでの現実、グレーバーによって展開されてきたアナーキズム論を、これからも継続的に発展させていく上で、常に参照されるべきであろう。

（たなか・ひかる 明治大学法学部教授）

【参考文献】

荒畑寒村〔訳〕（1913）「夢の娘——エンマ・ゴールドマン」『近代思想』第1巻第11号（8月）、217頁〔ヒポリット・ハヴェルによるものだが荒畑による要約であり、発表時の著者名も荒畑となっているため、ここでは著者名を荒畑としておく〕

- 荒畑寒村 (1914) 「六雑誌瞥見」『近代思想』第2巻第1号 (10月1日), 30-31頁
- Farrow, Lynne (2012 [1974]) 'Feminism as Anarchism'. in : *Quiet Rumours : An Anarcha-Feminist Reader*, Third Edition, Texts Collected by Dark Star, Oakland, CA. and Edinburgh : PM Press, pp.19-24.
- Fornarola, Isaac (2019) 'How a Vermonter's Radical Politics Laid the Groundwork for Revolution in Rojava', *Burlington Free Press*, October 31. Accessed at <https://www.burlingtonfreepress.com/story/news/2019/10/30/vermonter-theories-laid-groundwork-political-revolution-rojava/2483748001/>.
- Goldman, Emma (1969a [1910]) *Anarchism and Other Essays*, with a new Introduction by Richard Drinnon, New York : Dover Publications [First published in 1910 by Mother Earth Publishing].
- Goldman, Emma (1969b [1910]) 'Anarchism : What it Really Stand for', in : *Anarchism and Other Essays*, pp.47-68.
- Goldman, Emma (1969c [1910]) 'The Tragedy of Woman's Emancipation', in *Anarchism and Other Essays*, pp.213-225.
- Goldman, Emma (1970 [1931]) *Living My Life*, Vol. I-II, New York : Dover Publication [First published by Alfred Knopf Inc. in 1931] (小田光雄・小田透訳『エマ・ゴールドマン自伝』上・下, ぼる出版, 2005年).
- Goldman, Emma (2003 [1897]) 'Marriage' [Essay in the *Firebrand*, New York, 18 July, 1897], in *Emma Goldman, A Documentary History of the American Years, Vol.1, Made for America, 1890-1901*, Candace Falk et al. (eds.), University of California Press, pp.272-273.
- Graeber, David (2002) 'The New Anarchist', *New Left Review*, 13, January-February, pp.61-73.
- Graeber, David and Grubacic, Andrej (2004) 'Anarchism, Or the Revolutionary Movement of The Twenty-first Century'. Accessed at <https://theanarchistlibrary.org/library/andrej-grubacic-david-graeber-anarchism-or-the-revolutionary-movement-of-the-twenty-first-centu>.
- グレーバー, デヴィッド (2006) 『アナーキスト人類学のための断章』高祖岩三郎訳, 以文社
- グレーバー, デヴィッド (2015) 『デモクラシー・プロジェクト——オキュパイ運動・直接民主主義・集合的想像力』木下ちがや・江上賢一郎・原民樹訳, 航思社
- グレーバー, デヴィッド (2016) 『負債論——貨幣と暴力の5000年』酒井隆史監訳, 以文社
- Greenway, Judy (1997) 'Twenty-first Century Sex', in *Twenty-first Century Anarchism, Unorthodox Ideas for the New Millennium*, Purkis, Jon and Bowen, James (eds.), London : Cassell, pp.170-180.
- Havel, Hippolyte (1969 [1910]) 'Biographical Sketch', in *Anarchism and other Essays*, pp.1-40.
- ハヴェル, ヒポリット (2000 [1914]) 「エンマ・ゴールドマン小伝」伊藤野枝訳『定本 伊藤野枝全集 第4巻 : 翻訳』學藝書林, 60-83頁 (初出は『婦人解放の悲劇』東雲堂書店, 1914年)
- 伊藤野枝 (2000a [1914]) 「自序」『定本 伊藤野枝全集 第4巻 : 翻訳』學藝書林, 9-12頁 (初出は『婦人解放の悲劇』東雲堂書店, 1914年)
- 伊藤野枝 (2000b [1920]) 「乞食の名誉」『定本 伊藤野枝全集 第1巻 : 創作』學藝書林, 245-266頁 (初出は『文明批評』第1巻第3号, 1918年4月号と推定されるが, 発禁処分にあったため刊行されず, その後『乞食の名誉』(聚英閣, 1920年)所収)
- 伊藤野枝 (2000c [1919]) 「婦人労働者の現在」『定本 伊藤野枝全集 第3巻 : 評論・随筆・書簡2——『文明批評』以降』學藝書林, 110-115頁 (初出は『新公論』第34巻第12号1919年12月号)
- 伊藤野枝 (2000d [1920]) 「婦人の不平は意志の欠乏から」『定本 伊藤野枝全集 第3巻 : 評論・随筆・書簡2——『文明批評』以降』學藝書林, 209-213頁 (初出は『婦人世界』第15巻第9号, 1920年9月号)
- 伊藤野枝 (2000e [1923]) 「或る」妻から良人へ——とらわれた夫婦関係よりの解放』『定本 伊藤野枝全集 第3巻 : 評論・随筆・書簡2——『文明批評』以降』學藝書林, 250-258頁 (初出は『改造』第3巻第4号, 1923年4月号)
- Kastner, Jens (2020) 'Die Zwischenraume nutzen! Nachruf auf den Anarchisten und Anthropologen

- David Graeber : Geboren am 12. Februar 1961 in New York City, gestorben am 2. September 2020 in Venedig, 1. Oktober, *Libertäre Buchseiten : Beilage zu Graswurzelrevolution*. Nr.452, Oktober 2020, p.5. Accessed at <https://www.graswurzel.net/gwr/2020/10/die-zwischenraeume-nutzen/>.
- Kaymakçioğlu, Göksu (2011) *Emma Goldman, American Aide to Mujeres Libres in the Spanish Civil War 1936–1939*, Saarbrücken : LAP Lambert Academic Publishing.
- Kinna, Ruth (2020) *The Government of No One, The Theory and Practice of Anarchism*, Penguin (『アナキズムの歴史——支配に抗する思想と運動』米山裕子訳, 河出書房新社, 2020年).
- Knapp, Michael, Flach, Anja and Ayboğa, Ercan (2016) *Revolution in Rojava, Democratic Autonomy and Women's Liberation in Syrian Kurdistan*, London : Pluto Press (『女たちの中東 ロジャヴァの革命——民主的自治とジェンダーの平等』山梨彰訳, 青土社, 2020年).
- 幸徳秋水 (1907) 「婦人解放と社会主義」『世界婦人』第16号 (9月1日) 1頁
- Leduc, Sarah (2018) 'Far Left on the Front Lines : The Westerners Joining the Kurds' Fight in Syria', *France 24*, 19 March. Accessed at <https://www.france24.com/en/20180223-syria-afrin-foreigners-westerners-far-left-join-kurdish-revolution-fight-turkey>.
- Öcalan, Abdullah (2013), *Liberating Life : Woman's Revolution*, Köln : International Initiative.
- Öcalan, Abdullah (2019) *Jenseits von Staat, Macht und Gewalt*, Zürich/ Wien/ Münster : Edition Mezopotamya.
- 大杉栄 (2014 [1913]) 「新しい女」『大杉栄全集』第2巻, ばる出版, 124–125頁 (初出は『近代思想』第1巻第10号, 1913年7月1日)
- 大杉栄 (2015 [1906]) 「予の想望する自由恋愛」『大杉栄全集』第1巻, ばる出版, 101–103頁 (初出は『家庭雑誌』第2巻第5号, 1906年12月1日)
- Rosa, Red and Maria, Black (2012 [1971]) 'Anarcha-feminism : Two Statements, in : *Quiet Rumours : An Anarcha-feminist Reader*, Third Edition, Texts Collected by Dark Star, Oakland, CA. and Edinburgh : PM Press, pp.15–17.
- Shulman, Alix Kates (1983) 'Emma Goldman : Anarchist Queen', in *Feminist Theorists, Three Centuries of Women's Intellectual Tradition*, Dale Spencer (ed.), London : Woman's Press.
- 田中ひかる (2002) 『ドイツ・アナーキズムの成立——『フライハイ』派とその思想』御茶の水書房
- 田中ひかる (2015) 「「新しいアナーキズム」はなぜ「新しい」のか——思想と運動の変容に関する史的考察」『歴史研究』第52号, 39–76頁
- 田中ひかる (2019) 「アナーキズムによる女性の抑圧——大杉栄の「自由恋愛」とエマ・ゴールドマンの「三角関係」の比較から考える」『初期社会主義研究』第28号, 51–76頁
- 田中ひかる (2020a) 「ロシア出身のユダヤ系移民によるアナーキズム運動——「人の移動」と思想・運動の形成」『ロシア史研究』第104号, 25–53頁
- 田中ひかる (2020b) 「ロシア革命とロシア人アナキスト亡命者たちの思想変容」『近代ヨーロッパと人の移動——植民地・労働・家族・強制』山川出版社, 164–186頁
- 田中ひかる (2020c) 「エッタ・フェーデルンとエマ・ゴールドマン——自伝 *Living My Life* (1931) の影響についての考察」『明治大学教養論集』547, 89–106頁
- 田中ひかる (2021) 「伊藤野枝によるエマ・ゴールドマンの思想の受容について——大杉栄・荒畑寒村との比較を中心に」『初期社会主義研究』第29号, 174–195頁
- 梅森直之 (2016) 『初期社会主義の地形学——大杉栄とその時代』有志社